

・70代でも健康

身長一六六・五センチ、体重八二キロ、一見して高血圧並びに糖尿病現役、または予備軍のような体形だが、血圧は上が一二三で下が七三。いくら働いても、直後で測って一三八の八八だからまあまあであるし、糖も蛋白も潜血も出ていない。

タバコは学生時代から超ヘビースモーカーだったが、昭和三四年十二月三十日の午前七時三十分、くわえたタバコに火をつけようとした瞬間、突然、寝ている以外には煙を吐き続ける自分の姿を想像し、その非人間的なイメージに言い知れぬ恐怖を感じてひどい自己嫌悪に陥り、黙ってその一本と残りのタバコを箱ごと紙屑籠に捨て、それ以来四〇年間、全く吸ったことがない。心理学的には最高の禁煙法らしく、止めたあと体がふるえるなどによく言われるが、そうした、体験は一度も記憶にないのだから不思議である。

酒は旧制弘前高等学校の学生であった終戦直後の十九歳のはじめの冬に、今でも古ぼけた証拠写真が残っているが、ドブロクを二升七合飲んだ珍記録がある程の酒豪であったが、五〇歳の時に、日本でテレビ放送が始まる以前からの放送局での、苛酷な労働と徹夜の連続が当たり前の不摂生が祟ったのか、左の腎臓から大出血し、辛うじて命を拾う大手術に助けられて、やっとの思いでシャバに戻れて後悔し、それからは乾杯の酒を飲んだフリをする程度になった。一升ビンの底を舐めていたのが、ビールの泡を一口舐めるだけの哀れな境遇になった。

睡眠時間が平均すると一日五時間半ぐらいしかとれないあわただしい生活は、旧制弘前高等学校の頃から七〇代の今日まで、全く変わらないのである。人生というかけがえのない貴重な時間のほとんどを、他人のために使い、他人に奪い取られてきた日々の連続のように思えてならないのである。

学歴無用論を数十年来掲げている私が最も嫌う学歴や勤続年数を比べると、公務員の能力は並はずれて高いらしく、私が旧制大学出身で三六年間勤めた実績のために、放送協会創立以来の最高額ですというご託宣とともに支払われた退職金(NHK36年間。2300万円程度)の少くとも二倍半はあるのだ。

この上に外郭団体などに天下りすると、理事の任期交替ごとに数千万円ずつが支払われるのだから、その差は膨大で、われわれの税金が高いのも当たり前なのだと思う。

しかし、現実には現実である。支給される公的年金は月額僅か税込み九万円に過ぎない。ローンがないのと、狭いながらも家と土地は自分のものだから、その分は気楽だが、せっぱ詰れば、これを売り飛ばして食べていかななくてはならない。その日は確実に数年後にはやってくるのである。退職後は自然を友として悠々自適などというのは、どこのどいつがぬかす言葉なのかと、品の悪い形容を使わざるを得ないほどの貧困感覚が日々に強くなってきた。しかし、私も男の端くれだから、誰か助けてとはおくびにも出せない。

・四〇歳代で憧れた老後

私の年代では、いわゆる定年(その頃は停年と書いた)が五五歳であった。

当時、私は悠々自適の日が来るのだと信じ込んでいたから、五六歳ではそれまでやれそうもないらしいので、あの憧れの自動車を運転してゴルフや釣りに行き、パチンコをやって、夜は親しい人とちよいと一杯という普通のサラリーマン生活を一年間味わって、それまでの初期のテレビの殺人的忙しさを忘却の彼方へ追いやり、二年目は学生時代に美学と西洋美術史を専攻し、かたわら西洋演劇史、映画史、バレエ史をこつこつ調べてきたのだから、これを生かさなくては損なので、五七歳では日本全国の、そして、五八歳になったら世界中の美術館や博物館や遺跡を訪ね歩き、五九歳には書きたいだけのものを書き、六〇歳になったら、自分の性格として、他人が作って行く社会を、腕を拱いて眺めているタイプではないので、いっそのこと枝振りの良い松の木でも探そうと考えていたのである。

・"やってみたいこと"

ひとこと言えば、緑の自然に包まれた環境の中で暮らして、何かの形で社会奉仕活動をしてみたいという十

代の青春からのわが想い。

しかし、理想や理念は一粒のオマンマにもならないのである。そして、人間は自分がやりたいことをやるためには、その数倍の犠牲を自らに払わなくてはならないのである。

しかし、自分が払うならば、精神的にも肉体的にも、時には経済的にも幾らでも払うが、家族にまで支払わせるには忍びない。

・オカミサンとの対比

私は途中の車窓からでも景色を觀賞したい風景派であるが、オカミサンはそこは眠っていて、もっぱらお土産派である。

私は片足がデパートに入ると、途端に頭のシンがずきずきして、一秒でも早くここを出たいと思うのに、オカミサンは片足が入った途端に別人の如く生き生きして、わが家のようにデパート中を歩き回るのである。

あとはどうにかなるさは男の金銭哲学である。腕一本で稼いでやらあという気がある。

それに対して女の金銭哲学は、あとはどうにもならないである。

・職業観

放送に全く関心がなく、偶然の出会い頭で就職してしまった私は、はじめてマイクロフォンの前に立った瞬間にも、しまった、自分は職業の選択を誤ったと思い、その観念が、一〇年近くも続いてしまった。

周りは放送に情熱を持ち、生きがいを感じている優秀な人達ばかりであったのに、私が三六年も勤めてしまった理由はたった一つで、日本にテレビ放送が始まったからであった。そこでの職人的な仕事は、下町育ちの私の性格に、どこか適する部分があった。優秀な人達のあとをついて行って、現場の一介の職人として、自分のやれる部分にこだわり、仮に十分な仕事をして、へい、旦那、これしか出来やせんで、申しわけござんせんとさらりとその場を離れて、また次の仕事に黙々と精を出す点だけに、自分の価値を見出した。

(月に2日の休みが取れれば、今月は幸せな月だと思い、週に2回昼食が人並みに食べられれば、今週はなんと幸運だったのだろうと喜ぶ日々が36年も続いた。)

私は小学校一年生の時に、急性中耳炎をこじらせて、この坊やはもしかしたら

小学校を出ても、電報の片仮名が読める程度の頭になってしまうかもしれませんよと、執刀する病院長が私の両親に話しているのを聞いたくらいの大手術を左耳に受け、骨を削る音が今でもなんとなく想像出来るほど、生死の境をさ迷った。

そのせいか鼻が悪く、よくまあアナウンサーと呼ばれる職種が三六年間も勤まったものだと思われるくらいの鼻声で、匂いは全く感じない。人間ドックで頭の写真をレントゲンで撮ると、担当の医師が即座に鼻が悪かったですねと診断する。

・引っ込み思案

あなたの長所は何ですかと質問すると、短所はすぐに見つかりますが、長所はすぐには思い浮かびませんがとか、長所は同時に短所になるのではありませんかなどの曖昧な言いわけが最初に出てくる人が多い。こうした態度を謙虚と言ったりする。これは謙虚ではなくて、引っ込み思案以外のなにものでもない。

人間にとって必要なのは、「われここに生けり」とする実感を持ち続けることである。

いま、むやみにゆとりだの何々に優しいだの悠々、安らぎ、癒し、憩いなど、まるで人生の時間を止めなくてはならないような言葉が溢れている。これらに、惑わされてはいけない。

・女性のおしゃべり

・子育てが終わったという四〇代の女性が一樣に口にする言葉は、「夫との会話がない」である。

(もともと喋る分量が違うのである。)

・奥さんの話は、女性特有の何の脈絡もなくあちこちへ飛び形で続く。
・女性の話だから、聞きながらああこの話は三回目だなとか、この話の次はあの話だな
と思う場合はしばしばだが、相手は喋ることに自分の存在理由の重要な一つを見出している「おんな」なのだから仕方がない。

どんな話でも、最後の結びは、だからあんたは駄目なのよという目の前にいる亭主への罵倒や
こきおろしになるのが、「おんな」の話の通常だと言われる。

・女性の話し方は時間通りにこと細かく流れ、時折横道にそれて、沿岸の風景描写をやりながら、「」でくくらずにはならないくらい自分と他人の言葉を再現し、結論はいつまでたっても出て来ない。情緒文体なのだ。

ところが、男性の話し方は結論が先なのだ。途中の部分は省略に省略を重ねていく。結論がないと次の仕事に取りかかれないのである。結論から原因を分析する。

子供が大学生や社会人になって家を離れて行くと、途端に話題が消え始める。

妻は夫の仕事の内容がよくわからないし、夫は近所隣や地域など、妻が生きている場所の事情には、すでに全くうとくなっている。

「結婚前は男が喋って女が聞く。結婚すると女が喋って男が聞く。そして、五年もたつと両方が大きな声を出して喧嘩して、隣の人が聞いている」

確か中近東の言葉である。結婚前は男はこの娘をお嫁さんにしようと、あることないこと一生懸命に喋り、自分の前途は洋々であると話す。娘は私のような者でも貰ってもらえるかしらと、しなを作って聞く。結婚すると女はがらりと変り、あの果しないお喋りに変身する。そして、五年もたてば、どこの家庭にでもある風景を、自分達で原作、脚色、演出、主演するのだ。夫婦は一心同体でもなければ、一心異体でもなく、基本的には異心異体なのかもしれない。ただし、女性は一心同体であろうとする要求が強い。

・入口か出口か

下半身が重いので病院へ診察して貰いに行った妻が言った。

「明日結果がわかるんだけど、おっかなくて聞けないから、私の代りにあなたがお医者さんのところへ行ってエ、ね、お願い」

翌日病院から帰って来た夫が言った。

「おい、入口はなんともないってサ」

「なに言ってるのよ、あそこは出口よ」

男にとっては入口だが、女にとっては赤ん坊の出口なのだ、発射する性と受けとめる性では、正反対なのだから、たとえ合体しても、心は異なる所にあるのだろう。

春春夏六秋一無冬（しゅんさんかろくしゅういちむとう）で、春は陽気が良いから三日に一度、夏は暑苦しいので六日に一度、秋は爽やかなので一日おき、冬は湯たんぽ代りに抱いて無御限と、昔の人が教えた。

"少年老イ易ク、学成り難シ"の実感が、体の隅の方からゆっくりとこみあげて来るのが四〇代である。私自身も三〇代までは徹夜の、一晚や二晩は何ともなかったが、四〇歳の声を聞くと同時に、徹夜をすると、がくっと体力が落ちたのを、今でもはっきりと覚えている。

その一方で、二〇代は空気の時代で、存在しているのだが、どこにいるかわからず、三〇代は液体で、存在しているが、どの器にも合わせさせられ、そして、四〇代で固体となって、鉄か銅か金か銀かで存在する。

五〇代は同じ鉄でも、刀剣になるか灰皿になるかで分れ、六〇代以後はそれを磨き上げていくのである。

くたびれる反面では、鉄の如き精神力を養わなくてはならないが、人生はここで決まる。

家族は優しさか思いやり、いたわり、励まし、厳しさ、助けあい、親戚縁者から向う三軒両隣とのつきあい、夫婦喧嘩、兄弟姉妹の喧嘩、そしてしまいには泣く泣くも良い方を取る

形見分けから遺産相続争いで骨肉相喰む状況に至るまで、ほとんど情緒が主体の集団なのである。どうしても、日頃の小さな感覚でのやりとりが、良きにつけ悪きにつけ生活の底流となる。

退職して収入が激減し、ぜいたくは言っていないのだと覚悟したら、何が食べたいのと聞かれても、豪華な料亭へ行くわけではなく、せいぜい肉か魚か、カレーか湯豆腐かぐらいの区別しかないのだ。低次元での欲望である。

その上、虚々実々の駆け引きで、一万円をせしめたりやらなかったりしてきた試練を通して、相手の出方は知り尽くしている。

=>あのNHKの名アナウンサーの老後とは思えない。。。

私の両親が金婚式を迎えたので、親戚縁者が寄り集って、ささやかな祝宴を開いたことがあった。

乾杯が終ると、出席者から当然のこのように、五〇年持った秘訣は何ですかという質問が出た。その時父と母は、これが異口同音とはこのことかと思われるように、同時に言った。それもたったひとことであった。

「我慢ですよ」

全員が爆笑した。あまりにも見事な同時性に対してであったが、その笑い声の後ろに、どこでも夫婦であることの条件の重要な一つは、我慢にあるのだなという意識が感じられた。

父と母のどちらがどのように我慢したのかは、親子であっても私にはわからない。親といえども、夫婦は夫婦である。

人間には話をしている時に、お互いの眼と眼の距離が、三〇センチから五〇センチの間になり、しかも普通の声量の半分ぐらいの声で話しあうと、最も良く自分の心が相手に伝わっていく。

その典型はお母さんが赤ちゃんにおっぱいを含ませている時の二人の眼の距離なのだ。

この前は何の話をしたかとか、この人はどんな話題に興味を持っているかを知っておくのは、人間関係を作る会話にとって、重要な技術の一つなのである。

平凡な夫婦はここを自然に会得しているものである。話題が途切れると、相手の趣味や関心を抱いている問題に話を持って行って、素早く自分が聞き手に回るのである。

平凡とは何もしないけだるさの日々ではない。むしろ、明日は何をして楽しもうかという考える日の連続なのである。

まず自分の楽しさがあり、それが夫と妻が共有する楽しみになり、さらに家族の楽しみへとひろがって行くのが基本の型なのであろう。

しかし、自分から夫や妻に伝わる場合もあれば、妻を楽しませようと演出を考えているうちに自分も楽しくなり、さらに二人の楽しみへとひろがる形もあるに違いないし、逆もあるだろう。いずれにしるどんな形にしる、その中に自分がいることだけは確かなのだ。日曜日になると、夫だけがゴルフや釣りに出掛けて、妻はウイークデーと同じように家につくねんとしているのは、この範囲には入らない。

・ご臨終

父は大きく息を吸い込んだ。そして、それをゆっくりと吐き出した。静けさが父を包んだ。心臓マッサージを続けていた医師が、落ち着いた声で言った。

「ご臨終です」

病床の傍らに立っていた母と兄と私が

「ありがとうございました」

と言って、深く頭を下げた。看護婦さんが

「ご遺体をお浄めしますので、暫く外でお待ち下さい」

と、丁寧に告げた。私達は廊下へ出た。私は年老いて体が小さくなり、背中が丸くなってきた母を抱くようにして歩いた。

母は気丈に一滴の涙もこぼしていなかった。椅子に腰掛けさせると、母がぼつりとつぶやいた。

「これで私の役目は終わったよ」

その言葉は私の心の奥底にじーんと響いた。思わず母の横顔を見つめた。母は顔を真正面に向けたまま、瞳を静止させていた。兄は眼を赤くして無言で立ちつくし、寂しさをまぎらわそうとするのか、タバコに火をつけた。

「長い間ご苦労さんでした」

私は母が膝の上に置いていたしわだらけの手の甲を押えて、囁くように言った。

「うん」

なぜか母は大きくなずいた。

父の死の瞬間からあとのほんの一分間ほどのこの情景を、私は印象に深く刻んでいる。

私の役目は終わったよという母のつぶやきが、昨日のことのよう鮮やかに耳に残っている。

二人は結婚して五十二年の時間を共に生きた。夫婦揃ってよく働いたという想い以外に、特に記憶にとどめているものは何もない。

鈴木 健二 1929年東京生まれ。東北大学で西洋美術史を学ぶ。著書 200 冊。青森在住。